

文部科学省委託事業「インクルーシブ教育システム構築モデル事業」 障がい者スポーツを通じた交流及び共同学習 「成果報告会」の概要

平成 29 年 1 月 11 日（水）（札幌視覚支援学校 参加者 86 名）

1 事業報告の発表

(1) 岩見沢高等養護学校

- 地域の高等学校 6 校と、障がい者スポーツを通じた交流及び共同学習を実施した。
- 2 年間の本事業を通して、生徒から交流内容の提案があったり、生徒が障がい者スポーツを余暇活動に取り入れたりするなど、生徒の主体的な活動の促進につながった。

(2) 札幌視覚支援学校

- 1 年目は高等部、2 年目は小学部と中学部において、児童生徒の主体的な取組となるよう児童・生徒会が中心となり、事前の打合せや当日の進行をするなどして取組を進めた。
- 交流校においては、道教委作成の「事前・事後アンケート」を活用することにより、児童生徒の障がい者理解等について、自己の変容を客観的に捉えることができた。

(3) 事務局

- 2 か年の文部科学省委託事業を通して、指定校と協力校において、障がい者スポーツを通じた交流及び共同学習に取り組んだ。アンケート結果から、障がいのない児童生徒の障がい者理解や、障がいのある児童生徒の社会参加に向けた意欲の向上などに成果があった。

2 講演・体験会「障がい者スポーツを通じた相互理解」

- ・車いすバスケットボール 岩崎 圭介 氏（札幌ノースウィンド）
- ・車いすカーリング 坂田谷 隆 氏（北見フリーグス）
- ・ブラインドサッカー 戸澤 文広 氏（ナマール北海道）

- 特別支援学校は、障がいのある子ども達にとって安心・安全に学習や生活ができる場所であるが、学校を卒業し、社会に出ると戸惑うことが多くある。障がい者スポーツは、スポーツを通じた異年齢集団による活動であり、様々な経験のある方々とかかわることができることから、学校教育にも有効である。
- 障がい者スポーツの競技人口は少なく、選手層が高齢化している。本事業を通して、学校教育での障がい者スポーツに着目したことは、障がい者スポーツの理解啓発にとっても貴重な機会となる。
- 障がい者スポーツは、競技によっては激しいぶつかり合うため、怪我をするイメージがあり、学校教育に取り上げられることが少ないようだが、子どもが一人で家の近所で自由に遊び回ったり、町中を単独で歩いたりすることと比べると怪我の可能性は低いと考えている。障がい者スポーツは、障がいの特性に応じたルールに基づき競技が行われることや、安全に配慮されたスペースでの活動となることから、安全に取り組めるものである。



【障がい者トップアスリートによるパネルディスカッション】



【フロアーカーリング体験会】

3 参加者の声(アンケートより)

- 障がい者トップアスリートの方の話がとてもよかった。特別支援学校ばかりではなく、通常の学校にも、この事業で取り組んだことを広めてほしいと思う。
- 障がい種を超えた（視覚障がい、肢体不自由）障がい者スポーツの報告が聞けてよかった。このような機会が今後さらに増えることを願っている。
- 障がい者スポーツを通じた交流及び共同学習は、障がいのある子どもたちと障がいのない子どもたちがお互いを知り、理解し合うことのできる良い機会だと思う。他の学校でも取り入れていくとよいと思う。
- 講演を聞くだけではなく、実際にフロアーカーリングを体験した事で競技の魅力を実感できた。障がいの有無に関わらず、みんなで楽しめるスポーツであると思う。

（問合せ先 北海道教育庁学校教育局特別支援教育課 TEL 011-204-5774）